〈編集後記〉

環境ホルモン対策としての生物圏モニタリング

本号では，1998年6月に行われたKONC公開講演会「環境ホルモン問題の今」の記録を特集記事として取り上げた。戸高恵美子先生，森千里先生の論文は，御講演頂いた内容に基づいている。聴衆の一人として講演会に参加された根本久先生には，感想も含めて講演を補足する立場からご寄稿を頂いた。3論文合わせて15頁に満たないが，内容は分厚い本一冊に匹敵し，問題に対する的確な対策も提案されている。戸高先生が市民にもできる対策の一つとして指摘された「科学を勉強する」ことの大切さは，1999年2月に起きた所沢市産ホウレンソウのダイオキシン汚染報道事件をみれば明らかである。この事件に学ぶことは，森先生が対策として指摘された「疫学調査及びモニタリング」に基づく客観データの欠如である。環境モニタリングの重要性は，サイレント・スプリングの出版以来，繰り返し指摘されているにも関わらず，わが国では十分ではないらしい。解説書によれば，日本政府の環境ホルモン関連予算は1998年時点で180億円にも達すると言われているものの，研究棟建設などの費用が中心で，中身にどれだけ配分されるかについての懸念が述べられている（中原英臣(1998)，環境ホルモン入門，pp. 188-189，KKベストセラーズ)。森先生のご指摘に従えば「疫学調査及びモニタリング」に予算は使われるべきであろう。モニタリングには環境ホルモン物質は勿論，物質が存在し機能する場としての生物圏が含まれるべきことは当然である。KONCを含めて自然保護団体は，生物圏モニタリングを通じて積極的に問題解決に貢献すべきである。環境ホルモンが人類に及ぼす影響を包括的に論じた警鐘の書「奪われし未来」(長尾力訳(1997)，翔泳社)のストーリーによれば，異変の最初のシグナルはハクトウワシやカワウソを始めとする生物圏モニタリングを端緒とした筈である。人を含めて環境ホルモンが動物の体と生活に及ぼす影響事例の多くは，脊椎動物に限られている。昆虫に及ぼす影響を論じられた根本先生の論考では，環境ホルモンが害虫の個体数を増加させる方向に働く可能性を指摘されている。性染色体が未発見の植物では，「環境ホルモンが人の精子数を減らしているのではないか？」といった類の疑問は発せられていない。私が所属している研究室の川崎稔子KONC会員によれば，奈良市春日山照葉樹林の先駆性樹木カラスザンショウは，雌雄異株で性転換するそうである。おもしろいことに，最近の性転換例は，メスからオスに変わる例が多く，調査個体群全体ではオス化が進んでいるという（第46回日本生態学会大会発表予定)。この現象は環境ホルモンとは無関係かも知れないが，動物の傾向とは異なっている。ところでカラシザンショウは台風がもたらす林冠ギャップを利用して次世代の後継樹の更新をはかる，ギャップハンターである。春日山には台風7号が襲来して大木を倒壊させ，多くの林冠ギャップを形成した。実に9年ぶりの台風らしい台風の襲来である。表紙の言葉にそのことを述べたが，このような話題もモニタリングあればこそである。表紙写真がその証拠としてKONC会員諸氏の記憶に伝えられることを願う。写真借用に関して仲介の労をお取り頂いた，朝日新聞大阪本社科学部，今井邦彦記者に感謝致致します。

特集記事以外に，本号も多彩な論文で紙面をかざることができました。原著論文をご寄稿下さった，山田美樹・浦部美佐子の両先生，KONC研究助成の報文をお寄せ頂いた矢部隆・大羽康利，岡田篤・立澤史郎・村上興正の諸先生，総説を特別寄稿頂いた西田睦先生に感謝します。いつもご寄稿下さる四手井，岡田，村田の諸先生には感謝の念でいっぱいです。昨年度のワークショップの報文を頂きました本多孝先生が問いかけられている，「自然を知り尽くしている人たちがどうして自然保護に非協力なのか」という問題提起を，KONCの一会員として重く受けとめています。　（山倉拓夫）